

【学術論文】

沖縄県における地域で活動する 精神保健福祉ボランティアの実践状況とボランティア支援者の思い

The Current Situation of Mental Health and Welfare Volunteering in Okinawa Prefecture and Thoughts from Volunteers

鬼頭 和子, 鈴木 啓子

要旨

本研究の目的は、沖縄県の精神保健福祉ボランティアの現状と課題を明らかにし、地域のボランティア担当者が、ボランティアに期待する支援を明らかにする。研究協力者は、沖縄県内の、精神保健福祉ボランティアの養成に関わる3か所の事業所の精神保健福祉ボランティア支援者に半構成面接を行った。データの分析は、質的記述的に分析した。研究協力者6名への面接調査の結果、精神保健福祉ボランティアによる支援の内容として、【公的支援が受けられないごみ屋敷の清掃】【公民館で行う区民との交流】【距離を保ちながらの声掛けや日常的な見守り】【精神科病院デイケア活動への技術提供】【精神障害者事業所活動への支援】が抽出された。また、2か所の事業所では、精神保健福祉ボランティアを募集しても応募がなく、応募があってもその後の活動に続かない現状が明らかになった。精神保健福祉ボランティアを継続させるには、何かを媒介として関わる方法や具体的な関わり方を示す必要があると考える。また、継続していた精神保健福祉ボランティアの特徴としては、1対1の関わりではなく複数名によるカラオケや料理などの活動を通じた交流であることが明らかになった。精神障害者への偏見や怖さがある現状の中で、精神保健福祉ボランティアによる活動を広げるには、複数人のボランティアグループによる活動を行うことが精神障害者の理解の促進と安定した活動の定着につながることを示唆された。

キーワード：精神保健福祉, ボランティア, 沖縄県

I. はじめに

わが国の精神医療は、2004年に施行された「精神保健医療福祉の改革ビジョン」以降、入院依存型から地域支援型へと移行が進められている。精神障害者の地域移行の流れのなかで、2008年より「地域を拠点とした共生社会の実現」として地域住民と障害者が地域の中で支えあう社会づくりがテーマとなり、精神障害者に対する地域住民の理解を目指した様々な取り組みがなされている（厚生労働省, 2019）。

共生社会の実現のための一つの方法として、ボランティアによる福祉活動がある。海外においてはイギリスで発祥したボランティア援助として、地域生活をおくる精神障害者に対し専門家ではなく、同じ目線の地域住民が「友人として支える」支援が始まり現在では50以上の団体による支援が行われている（Thmpsonら, 2015）。このように地域生活をおける精神障害者へのボランティ

アが海外で盛んに行われる理由は、精神障害者は、円滑なコミュニケーションを行う機能障害などによりソーシャルネットワークが脆弱なため地域で孤立しやすい特徴を持つからである（Bradshawら, 1998）。よって、ボランティアは、精神障害者が社会活動に興味を持てるよう一緒に外出したり、地域で孤立しないよう話し相手になるなどのサポートを行っている（Bradshawら, 1998）。

日本においては、精神障害者へのボランティアは精神保健福祉ボランティアという名称で知られている。精神保健福祉ボランティアの活動内容は、バザーなど行事の手伝い（鮫島, 2004）、精神障害者の集まるサロンのボランティアなどがある（栗原, 2008）。このような精神保健福祉ボランティアを行うためには一定の研修を受ける必要がある。研修の内容は都道府県によって異なるが、一般的には、ボランティアの定義、精神医療の歴史、精神医学の基礎知識について精神科医から講義を受ける

(今井ら2009)。その後、精神障害者とコミュニケーションのとり方を学習し、当事者や当事者家族との交流、そして精神科病院での体験訪問学習を行う(今井ら2009)。しかし、この講義の受講により、医学知識に基づく精神障害者理解が促進されることで、精神障害者をケアする存在としてとらえてしまうことから、一人の人としての理解の促進を妨げるとの批判がある(今井ら2009)。また、精神保健福祉ボランティア講座を受講する動機は、身内や親族に精神障害者がいる者が最も多く、次に職場に精神障害者がいる人など、精神障害者と何らかの接触体験がある者がほとんどであり、接触体験のない者はわずか2%未満であった(鮫島, 2004; 今井ら, 2009)。その理由として、精神障害者は精神科病院に長期間隔離収容されてきた歴史があり、地域住民との接触体験がほとんどなかったことや、マスメディアの誤った報道の影響から、多くの地域住民は精神障害者にネガティブなイメージを持っていることである(鮫島, 2004)。以上のことから、精神保健福祉ボランティアは、精神障害者への偏見に加え、ボランティアを行うために一定の研修を受ける必要があるなど、一般のボランティアと比べハードルが高く、そのため、身近に精神障害者がいる家族などの接触体験のある限られたボランティアで行われてきたと考える。

現在、沖縄県における精神障害者福祉手帳受給者数は45,000人であり、そのうち、通院者は約40,000人、入院患者数は約5,000人存在する(平成28年度沖縄県保健医療部健康長寿課業務資料)。沖縄県における、精神保健福祉ボランティア養成は1988年より始まり、精神障害者家族会が主体で行われ、現在は公益社団法人沖縄県精神保健福祉会連合会が担っている。活動は那覇市で行われ、主な内容は啓発活動として広報誌「にぬふあぶし」の発行や、スポーツ大会運営、精神保健福祉分野の人材を養成するためピアサポーター養成講座、家族相談員養成講座、ボランティア講座が含まれる(沖副福連, 2019)。また、沖縄県本島においては、各市町村に設置された社会福祉協議会において、ボランティア活動が実施されている。しかし、沖縄県の精神保健福祉ボランティア養成状況や具体的活動についての先行研究がなく、実態は明らかでない。そこで第一研究として、地域でのボランティア支援の現状を把握するため、沖縄県本島26か所の市町村社会福祉協議会ボランティア担当職員に郵送による質問紙調査を行った。その結果、ボランティアを実施している市町村は12.3%と低く、81.3%の市町村が精神障害者へのボランティア支援を行っていない現状が明らかになった(鬼頭ら, 2020)。

そこで本研究では、沖縄県精神保健福祉会連合会および、精神保健福祉ボランティア支援を積極的に実施して

いる沖縄県本島の社会福祉協議会ボランティア担当者を対象に、精神保健福祉ボランティアが行っている具体的な実践状況およびボランティアに期待する支援について調査を行った。

本研究の意義は、精神障害者の地域移行が加速する中で、ボランティアとして活動する地域住民との連携が今後ますます必要となるため、沖縄県における精神保健福祉ボランティアの実践状況を把握し、ボランティア支援者の思いを明らかにすることを通して、今後ボランティアを育成する上での示唆を得ることである。

II. 研究の目的

沖縄県の精神保健福祉ボランティアの実践状況およびボランティア支援者のボランティアへの思いについて明らかにする。これにより、今後のボランティア育成およびボランティア支援に関する示唆を得る。

III. 用語の定義

精神保健福祉ボランティア

今井ら(2009)の先行研究では、精神保健福祉ボランティア講座の受講は都道府県によって異なると述べられており、沖縄県において精神保健福祉ボランティアがどのように養成されているのか実態が明らかでないことから、本研究の精神保健福祉ボランティアとは、精神保健福祉ボランティア講座の受講の有無に関わらず精神障害者を対象に自らの意思により無償で活動するボランティアとした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究方法

インタビュー調査

3. 調査期間

2019年2月～2019年5月迄

4. 研究協力者

研究協力者については、沖縄県において唯一開始当時から精神保健福祉ボランティアの養成に関わっている沖縄県精神保健福祉会連合会に連絡し、精神保健福祉ボランティアの養成に関わる事業所を紹介してもらい、その事業所のボランティア支援者の研究協力を求めた。さら

にその事業所から、精神保健福祉ボランティア活動を活発に行っている事業所を紹介してもらい研究協力者を募るというスノーボールサンプリング方式で行った。

5. 調査方法

インタビューガイドを用いて、研究疑問として精神保健福祉ボランティアの養成状況、精神保健福祉ボランティア応募動機、精神保健福祉ボランティア支援内容と課題、ボランティアに期待するについて半構成化インタビューを行った。インタビューは、研究協力者の同意を得た上で、ICレコーダーを用いて録音し、メモを取りながら実施した。インタビューは、精神障害者へのボランティアに関わる業務を行う職員が複数名であった2施設についてはグループインタビューを行い、1施設は個別インタビューを実施し合計6名から協力を得た。各事業所の平均インタビュー時間は、43分（範囲：36～54分）であった。

6. データ分析方法

インタビューで得た3つの事業所のデータを逐語録に起こし、その内容を熟読したうえで、研究疑問に関わる発言を選定し、要約した。語られた内容を要約してコード化し、共通点や相違性、関連性に着目し、共通した内容をサブカテゴリー化し、さらにカテゴリー化して分析を行った。その過程において信頼性を高めるため、共同研究者とディスカッションを行い、双方の合意形成が得られるまで検討を継続した。

7. 倫理的配慮

研究協力者へは、説明文書を用い、口頭で本研究の趣旨、研究方法、倫理的配慮等について説明を行い、同意書への署名をもって研究参加への意思を確認した。本研究は名桜大学倫理委員会の承認（承認番号30-004-1）を得た後に実施した。

V. 結果

1. 研究協力者の属性

研究協力者は精神保健福祉ボランティアの受け入れを行っている3か所の事業所の職員6名であった。性別は男性が1名、女性が5名であった。職種は全5名がソーシャルワーカーであり、1名が家族会運営者であった（表1参照）。

表1. 基本属性

	インタビュー形式	協力者数	職種
A事業所	グループインタビュー	3名	ソーシャルワーカー ソーシャルワーカー 家族会運営者
B事業所	個別インタビュー	1名	ソーシャルワーカー
C事業所	グループインタビュー	2名	ソーシャルワーカー ソーシャルワーカー

2. 事業所の概要

1) A事業所の概要

A事業所は沖縄県南部地域に在る。現在A市から委託を受け、生活支援センター、就労支援等総合的に事業を行っている。A事業所は家族会から発展した経緯もあり、精神保健福祉ボランティアの養成、精神保健福祉ボランティア募集、受け入れも行っていった。

2) B事業所の概要

B事業所は、沖縄県中部地域の市町村に設立された社会福祉協議会にあるボランティアセンターである。B市ボランティアセンターは地域福祉推進課が行っており、具体的な内容は、ボランティアの募集、情報誌の発刊、ボランティアを必要とする人の情報を集約しマッチング、実際の支援への同伴などをおこなっていた。ボランティア支援は、精神障害者だけでなく子供の居場所作りや高齢者へのボランティア支援など幅広く行っていった。

3) C事業所の概要

C事業所は、沖縄県中部地域の市町村に設立された社会福祉協議会にあり、役所から総合相談事業を委託され、高齢者から子ども、障害者まで、幅広く相談事業を行う相談センターである。相談員は地区ごとに分かれている。具体的な内容は、個別の総合相談と地域の相談業務、支え合い活動、住民の行う福祉活動の担い手の支援および活動の手伝い等を行っていた。

3. 精神保健福祉ボランティアの養成状況

研究協力者の語った精神保健福祉ボランティアの養成状況は14コードから7サブカテゴリー、4カテゴリーが抽出された。カテゴリーは【 】, はサブカテゴリーは〈 〉コードを「 」示す（表2参照）。

A事業所は、家族会から精神保健福祉ボランティアの養成への依頼があり、開始当初は養成講座を行っていた。この講座では医学的視点から医師が初めに疾患の概説をするという内容であったため、「病気のことを知りたい人が受講してくるようになって、家族が精神疾患を持つ身内とどう付き合うかについてボランティア講座を受けて学ぶ」といった地域住民が【ボランティアに繋がらな

表2. 精神保健福祉ボランティアの養成の状況

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
ボランティアに繋がらない座学	精神疾患の知識を得るためのボランティア養成講座への参加	統合失調症やうつ病は保健所でも興味や知識を紹介する講座はたくさんあり、私たちがあえて時間を割いてボランティアにしなくても、ただ、病気の誰々さんっていう見方を最初から求めてなく、病気はいろんな所で知ることができるので、興味があれば本を読んだり、(知識を得る機会を) 提案するので、ここでは(座学は)今はしてない (精神障害の医師が病気の説明を先にすると) 病気のことを知りたい人が受講してくるようになって、家族の方が精神疾患を持つ家族とどう付き合うかをボランティア講座受けて学ぶ
	ボランティアに繋がらない座学での養成	過去には、先に座学で病気のことを話した後に(当事者と)交流し、全員ではないけど一部の人は病気についてのインタビューのようなものを当事者さんと始めた ボランティア活動支援事業自体は、もう十何年かな、この支援センター自体が16年目ぐらいで、4年目ぐらいからは市からそのまま引き継いで活動しており、そのときから座学がメインだったが、実際に講座受けてボランティアになってくれるかっていうとならない
先輩ボランティアによる支援内容の講和	先輩ボランティアによる支援内容の講和	(ボランティアが増えないから) 以前からボランティアに何回も来ている人に、(ボランティア活動は) こういうことをしていますと具体的に入って話をしてもらっている ボランティアの先輩の話は、(新しいボランティア)の皆さんハードルが下がり、『それでもいいんだ』って思っていたが、安心して、分からないことは先輩にも聞くという関係をつくってほしいので大事な事になって思っており、試行錯誤している 一度ボランティアの先輩に入ってもらい話をしてもらった
当事者の講和による当事者理解の促進	精神障害者への理解促進を図る当事者の体験講和	精神障害者支援センターの当事者が自分の病気の体験とか、『普段こんな生活しているよ』とか、『お仕事こんなやつっているよ』とかを出前講座の中で講師みたいな形で来ていただき、地域の皆さんに自分の体験を語ってもらう
実際の体験してもらうことでの精神障害者理解の促進	必要に応じて職員から情報を伝達	ある程度定着したボランティアには様子を見ながら、今これが情報として欲しいのかなと思えば職員が説明し、必要に応じて様子を見ながら行っている
	コミュニケーションの機会をつくることでの当事者理解の促進	今日の活動のオリエンテーションをしたらずぐに実際に当事者に対してこちらでやっているプログラムに入っていたが、午後から実際にどんなふうに住んでいるのか当事者に聞いてみましょうというところを行い、一人の人として一緒に話をしてもらう 当事者から、こんな暮らしを私たちはしていて、ボランティアには一緒にいてほしいとか、話をしてほしいっていうことを話してもらって終了するように組んでおりそれをしたことで、まだ定着ってなかなか難しいが、それをしたら意外に、じゃあ、今の自分のまま来ていいことがわかってもらえる
	実際の体験を通した当事者理解の促進	何か特別な勉強をしたりとかではなく、すぐにみんな(当事者)と一緒に卓球したり、ヨガを一緒にやってもらったり、一緒にご飯を食べてもらい、どういう方を対象にしたボランティアか理解してもらい、どうでしたかって振り返りをする 座学をメインにしていた時期もあれば、毎年結構リニューアルを繰り返しながらやっており、今も方法をずっと模索している。例えば、つい最近では募集をかけた後に(実際体験)をする方法で行った 初めからこういう人だから、ここに対して何かをサポートするみたいな感じでいくと、逆にこっちのほうが構えてしまうので、(当事者と)普通の接触をしてもらい、『あれ、あんまり自分と変わらない』って思ってもらい病気っていう目で見るといけないなっていうのを感じてもらおう

い座学】となっていた。そのため、今は「今日の活動のオリエンテーションをしたらずぐに実際に当事者に対してこちらでやっているプログラムに入っていたが、午後から実際にどんなふうに住んでいるのか当事者に聞いてみましょうというところを行い、一人の人として一緒に話をしてもらおう」ことや、「何か特別な勉強をしたりとかではなく、すぐにみんな(当事者)と一緒に卓球したり、ヨガを一緒にやってもらったり、一緒にご飯を食べてもらい、どういう方を対象にしたボランティアか理解してもらい、どうでしたかって振り返りをする」など【実際の体験してもらうことでの当事者理解の促進】を行っていた。

しかし、ボランティアに応募してきても長く続かない

実態があり、「(ボランティアが増えないから) 以前からボランティアに何回も来ている人に、(ボランティア活動は) こういうことをしていますと具体的に入って、(新人のボランティアに) 話をしてもらっている」といった【先輩ボランティアによる支援内容の講和】や、【当事者の講和による精神障害者理解の促進】を行っていた。

4. 精神保健福祉ボランティアの応募動機

研究協力者の語った精神保健福祉ボランティアの動機は9コードから、5サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された(表3参照)。

精神保健福祉ボランティアの動機では、「身内のための学習目的で応募してくる。」者や、「家族のネットワー

表 3. 精神保健福祉ボランティアの応募動機

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
精神障害者の家族やその友人による応募	精神障害者の家族やその友人の学習目的	家族ネットワークを使いながら、利用者さんの家族とか、そこから派生したお友達が、何かあったときにボランティアとして動く 身内のための学習目的で応募してくる
事業所立ち上げ前のスキル習得目的	障がい者支援事業所立ち上げ目的	事業所立ち上げの目的であることを初めから言ってくればいいのに、そう言ってくれたら、それなりにいろんなことを教えるけれども、(事業所立ち上げの目的であることを)何も言わずにやって来て、毎日来るんだけど、真面目な人と思っているうちに、実は(事業所の立ち上げ目的)っていう話になったりする 自立支援法が始まった当初というのは、結構ボランティアをやりたいという人が来て良かったけれど、何カ月かしていくと、どうも動きが変だなんて思っていると、実は、事業内容訓練をしていて、自分で事業所を立ち上げるみたいない人がいたりして、当初はそういう人が結構いた
	事業所立ち上げのため精神障がい者支援スキル習得目的	受講を希望される方でも、必ず1人や2人は事業所の、今から立ち上げるという人で、もう現に職員の人でスキルを習得したいという方もいます。会ってみると、作業所の方で、精神障害者の扱いが分からない、どう接していいか分からないから、ボランティアのレクチャーを受ければ身につく、そんな形で来る方もいて困る
精神障害を持つ当事者のリハビリの目的	精神科医の勧めによるリハビリ目的	病院の先生から勧められてボランティアをしたいということで、退院してまた仕事に就く予定で、いきなり仕事は難しいので、リハビリ的にボランティア活動(に参加してきた) (病院の先生に勧められた患者さんは)相談員に連れて来られる人や自分でチラシを持って来る方もいる (精神科病院を退院したばかりの患者さんがボランティアの希望に)来るけど、ちょっとまだ状態良くないよねっていうことで、今ボランティアとして、さすがに受け入れられる状態じゃない
	就労にむけたボランティアでの足慣らし	初めからそこへ(精神の事業所)行きたいということで、ボランティアで足慣らしというか、そういう人がボランティアに結構くる

クを使いながら、利用者さんの家族とか、そこから派生した友達が、何かあったときにボランティアとして動く。」といった【精神障害者の家族やその友人による応募】がボランティアの動機となっていた。

また、「自立支援法が始まった当初というのは、結構ボランティアをやりたいという人が来て良かったけれど、何カ月かしていくと、どうも動きが変だなんて思っていると、実は、(精神障害者のための)事業内容の訓練をしていて、自分で事業所を立ち上げるみたいない人がいたりして、当初はそういう人が結構いた。」といった【事業所立ち上げ前のスキル習得目的】が動機となっていた。また、精神障害のある当事者がボランティアに応募する動機としては【精神障害を持つ当事者のリハビリ目的】であり、「病院の先生から勧められてボランティアをしたいということで、退院してまた仕事に就く予定で、いきなり仕事は難しいので、リハビリ的にボランティア活動(に参加してきた)。」や、「初めからそこへ(精神の事業所)行きたいということで、ボランティアで足慣らしというか、そういう人がボランティアに結構くる」といったことが語られた。

5. 精神保健福祉ボランティアの支援内容

研究協力者の語った精神保健福祉ボランティアの支援内容については、32コードから10のサブカテゴリー、5カテゴリーが抽出された。

支援の内容として【公的支援が受けられないごみ屋敷の清掃】【公民館で行う区民との交流】【距離を保ちながらの声掛けや日常的な見守り】【精神科病院デイケア活動への技術提供】【精神障害者事業所活動への支援】を行っていた。

【公的支援が受けられない自宅の清掃】では、「寒いときはあまり気にならないが、だんだん暑くなってくる夏前は、家の異臭がだんだんひどくなり、地域の人から『あっちの家はちょっと異臭がするからどうにかできない』って言われ、行政のサービスも使えないし、一般のサービスも使えないから、ボランティアで清掃をやるしかない」などの公的支援が受けられない事への支援を行っていた(表4参照)。

【公民館で行う区民との交流】では、「踊りのサークルや、日舞があったり、太鼓の何かサークルなど地域の集まり場として自治公民館がとても充実したエリアなので、踊りの会に当事者の方も入って一緒に踊ったりとか、日舞の人が終わった後のお茶会に本人も参加してお菓子を食べてお話ししたりとかの場面も結構見られる」、「公民館のサロンは、元々は本人さん(当事者)に合わせたちょっとした活動プラスのお話会とかだったけど、体操とかを取り入れたら、今まで参加してなかった地域の方たちも来だして今は人数が増えて大きくなっている」など区長を中心とし地域住民を巻き込み(公民館での当事者の居心地のよい場づくり)が行われていた。

表4. 精神保健福祉ボランティアの支援内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
公的な支援が受けられないごみ屋敷の清掃	行政のサービスが受けられないごみ屋敷の清掃	寒いときはあまり気にならないが、だんだん暑くなってくる夏前は、家の異臭がだんだんひどくなり、地域の人から『あっちの家はちょっと異臭がするからどうにかできない』って言われ、行政のサービスも使えないし、一般のサービスも使えないから、ボランティアで清掃をやるしかない 障害の福祉サービスの中でヘルパーはあるけど、『こんな状態では家事の援助できないよ』っていう家は、夏前になると、多いときは3～4件ぐらいの頻度でボランティアの力を借りて片付けできませんかとか、お掃除できませんかっていう依頼が多い (ごみ屋敷の清掃は)職員が下見の調査行き、厳しい所は職員だけで手前だけでも片付け、庭もごみなのか草なのかよく分からない状態だから草刈りも行い、それ以降は業者をお願いする
	自宅の清掃ができない精神障害者からの清掃依頼	ごみ屋敷というか、全くおうちが片付けられない人とか、家が荒れて、草が生えっぱなしとか、掃除したことがなく、掃除とか片付けをしてほしいっていう精神障害者の依頼が多く、片付けを一緒に入ったりしている
公民館で行う区民との交流	活動を通じての地域住民との交流	公民館でサロンやっている横で休み時期になると、中学生とかも公民館に出入りして一緒に、卓球をやったりしている 公民館のサロンは、元々は本人さん(当事者)に合わせたちょっとした活動プラスのお話会とかだったけど、体操とかを取り入れたら、今まで参加してなかった地域の方たちも来だして今は人数が増えて大きくなっている 踊りのサークルや、日舞があったり、太鼓の何かサークルなど地域の集まり場として自治公民館がとても充実したエリアなので、踊りの会に当事者の方も入って一緒に踊ったりとか、日舞の人が終わった後のお茶会に本人も参加してお菓子を食べてお話ししたりとかの場面も結構見られる 本人がゲートボールをやりたいって言ったので、駐車場にこのゲートボールの柵やゴールを自治会長さんが地域の鉄筋屋さんをお願いして作ったり、初詣行ったりとか、カラオケやその間に食べ物作って、『一緒にまた食べようね』みたり、誕生会したりして、当事者が楽しそうにしている 料理作るときとかには1人100円とか、材料代もらってという形で、自治会でサロン活動の費用を賄ったり、社会副協議会の方で助成費を活用して行っている (B地域の精神障害者の方)はゲーム的なものが好きなので、『ゲートボールやりたい』ってたら、ゲートボールするための準備を自治会長さんとか、地域の方集まって準備してみんなで集まった
	公民館での当事者の居心地のよい場づくり	B地区は、地域の中に4～5名精神障害を持つ方たちがいて、地域で状態が落ち着かないときに暴れてしまい、行く所がないから、ずっと徘徊し、住民の人が精神障害があると怖くて近寄れないみたいな印象が強くなって当事者も居づらくなっていたが、精神障害の当事者も地域住民も一緒に集まって『ユンタク会』みたいな話し合い、ざっくばらんに遊んだり、ちょっと集まる所を立ち上げ月2回ほど継続して行うようになった ボランティア活動みたいな、大々的なことはやってはいないけど、居場所づくりみたいな形で、地道な感じの活動をしている ご自宅に訪問というよりは、(本人さんの自立を考えると)居場所的なものができたらいいかなというふうに考えている 公民館には、当事者さんの都合で来ないことも多々あったりはするが、来なくても継続しながら、いつでも本人が来たときに居場所があるみたいな感覚で、それを継続できるのが今は一番かなって思う ちょこちょこ公民館に足を運ぶ精神障害を持っている方もいるが、作業所通っていたりとかして、タイミングが合わなくて参加できてないとかもあったりするけど、この会に参加しなくても、公民館で自治会長さんとお話ししながら、公民館がこの方たちの居場所というか、ちょっとゆんたくする場になっている D地区もC地区と似たような感じで、自治公民館に(精神障害者に)理解のある公民館の職員さんがいて、誘ってはいないがその方を頼って当事者の方も尋ねてきて、自然に輪の中に入っている 公民館での地域住民との交流の際、たばこをすごくいっぱい吸ったりする人に『あんた、タバコ吸っていたら早死にするよ』とか『吸い過ぎよ』とか当事者に言ったり、本人も『えへへ』って言いながら、そんな関係になっている
距離を保ちながらの声掛けや日常的な見守り	距離を保ちながら行う自宅訪問	公民館での活動は、体操と室内レクリエーションなど2週に1回、月1とかで集まり、地域の方たちもめったに合わない人たちと会うので、話とかが盛り上がり地域の情報を交換する場になっている
	日常での声掛けや見守り	2～3カ月に一回はちょっと手土産持って、家を訪問してその人の距離感を保ちながら元気づけて直接会話するような機会を持つ人もいる 精神障害者を支える活動として、自治会単位の出前講座の中で、地域で支え合いとか、見守りとか、サロンづくりとか、そういったのを社協も一緒にやっていますかという勉強会みたいのがあるが、受講された自治会さんのほうで、「見守り隊」を立ち上げて、その組織立ち上げた皆さんで緩やかにちょっと精神障害のある方の見守りを行っている

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
		<p>(見守り活動を) 立ち上げた後は、それぞれ家に訪問する所もあれば、訪問はしなくて、班ごとに誰が担当でとか決めていて、普段の見守り者の日常生活の中で、商店行ったりとか、仕事に行ったりとか、公民館へ行ったりとか、そういう生活の中でその方たちに出会ったときに声掛けしたりとかの日常的な見守りを行うなどその団体がやりやすいような形で行っている</p> <p>自治会ごとに特色は違うが、自然に見守りする所もあれば、しっかり『見守り隊』を組織的に立ち上げている</p> <p>入院していて退院され地元に住んでいる(当事者で) 公民館に来なかったとき、地域の人が『ああ、今日は来てないね』、『あれっ、この前歩いてたよ』とかって、みんな気にして見ており、地域で歩いている姿見て『まだ元気よ』って話して、『じゃあ今日は何処どこ行っていたんだね』とかって話したりしている</p> <p>D市は、自治会の加入率が低く、コミュニティが少しずつ薄れてきおり、誰が何をしているか分からないので、『あの人がちょっと汚れているし臭いもするから、誰なの、ちょっと見てきて』という相談がボランティアセンターに結構来る</p>
精神科病院デイケア活動への技術提供	精神科病院デイケア活動への技術提供	<p>滅多にないが近隣の精神科病院のデイケアからの依頼で、囲碁とかの何かプログラムの指導や陶芸か、お花だったか、何か技術をプログラムでやるので、それをやれる人いませんかとの依頼があった</p>
精神障害者事業所活動への支援	イベントとして行われる精神障害者事業所活動への参加	<p>精神障害の方のグループとか、事業所の福祉祭りとか、事業所での遠足とか、事業所の職員だけでは人手が足りないのでボランティアの依頼がある</p>
	日常的に行われている精神障害者事業所活動への参加	<p>大学生のボランティアさんもいるので、その方と一緒にちょっと散策としてオープンキャンパスなど一緒に案内して行ってもら</p> <p>イベントがなくても事業所に来てもらうとか自分の時間を使って興味のある活動に来てもらいボランティア活動を知ってもら</p> <p>時間を決めて来る方もいれば、空き時間だから来たよって前触れもなくやって来てお菓子食べながら当事者が事業所に来るのを待つボランティアもおり、当事者に対し『この人は話してほしくないのかな、どうなのかなって』考えて、ちょっとゲームして時間つぶして帰っていくボランティアもいる</p> <p>(定年後の女性の方) は、土曜日に行われている当事者の方が毎週決まったテーマで、例えばシーミー(清明祭)とか、好きなものとか、旅行とかっていうテーマでざっくばらんに話をする『つどい』という時間があるけど、面白い話が聞けて楽しいからそこだけに参加する</p>

【距離を保ちながらの声掛けや日常的な見守り支援】として、地域に住む精神障害者を見守るため(見守り活動を)立ち上げた後は、それぞれ家に訪問する所もあれば、訪問はしなくて、班ごとに誰が担当でとか決めていて、普段の見守り者の日常生活の中で、商店行ったりとか、仕事に行ったりとか、公民館へ行ったりとか、そういう生活の中でその方たちに出会ったときに声掛けしたりとかの日常的な見守りを行うなどその団体がやりやすいような形で行っている」など区民による日常的な見守りと、組織的な見守りが行われていた。

【精神科病院デイケア活動への技術提供】では、「滅多にないが近隣の精神科病院のデイケアからの依頼で、囲碁とかの何かプログラムの指導や陶芸か、お花だったか、何か技術をプログラムでやるので、それをやれる人いませんかとの依頼があった」と語られた。

【精神障害者事業所活動への支援】では、「精神障害の方のグループとか、事業所の福祉祭りとか、事業所での遠足とか、事業所の職員だけでは人手が足りないのでボランティアの依頼がある」イベントがあるときの支援や、事業所に「時間を決めて来る方もいれば、空き時間だから来たよって前触れもなくやって来てお菓子食べながら当事者が事業所に来るのを待つボランティアもおり、

当事者に対し『この人は話してほしくないのかな、どうなのかなって』考えて、ちょっとゲームして時間つぶして帰っていくボランティアもいる」など日々の活動への支援が行われていた。

6. 精神保健福祉ボランティアの課題

研究協力者の語った精神保健福祉ボランティアの課題については25コード、17サブカテゴリー、6カテゴリーが抽出された(表5参照)。

【利益にならないボランティア継続の難しさ】では、「バイトと比べれば、やっぱりお金も出ないし、自分の中に達成感っていうのも、その時々できっと難しい場所なので、大学生にはあまり期待できない」と語られた。【手を尽くしても応募がない精神保健福祉ボランティア】では、〈広く広報活動してもボランティアの応募がなく四苦八苦している〉ことや、「(ボランティアの募集を)どこに出すと、興味のある人が潜在的にいる方が引っ掛かってきてくれるか、つながってくれるかっていうのを知りたい」や、「怖いとは言わないけど、やっぱり何か仕事があるとか、家庭の事情でとか理由をいってボランティアが続かない」と語られた。

また、「病院の先生としては、社会参加の意味でボラ

表 5. 精神保健福祉ボランティアの課題

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
利益にならないボランティア活動への大学生参加の難しさ	授業以外の交流が持てなかった大学生ボランティアによる支援	大学は近いが大学生はかなりドライで、大学生との交流は期待していたほど実はなく、授業の単位として、つながりを持っていた時期もあったがそのときだけで終わってしまった
	ボランティアはアルバイトと比べお金も出ないし達成感が得られないので大学生の参加は難しい	バイトと比べれば、やっぱりお金も出ないし、自分の中に達成感っていうのも、その時々できると難しい場所なので、大学生にはあまり期待できない
手を尽くしても応募がない精神保健福祉ボランティア	大学や市民に募集してもボランティアの応募がなく四苦八苦している	大学に案内は出すが応募がないから連携とっておらず、広く市民からボランティア募集に切り替え、募集先に四苦八苦している (ボランティアの募集を) どこに出すと、興味のある人が潜在的にいるの方が引っ掛かってきてくれるか、つながってくれるかっていうのを知りたい
	広く広報活動してもボランティアの応募がなく四苦八苦している	4～5年ぐらい前、ほんとに四苦八苦していた時、カフェにチラシ置きに行ったりと 広報誌や新聞や、機関誌とか、チラシを作っているんな所に配布したり、ご近所とかに広報するが、過去にやっていた時も、広くいろんな所にポスターを貼ったりとか、チラシを配ったりしてしたが、(ボランティアに) 来てくださった方に、どうしてここを知りましたかって聞くと、結局、広報誌を見たとか、新聞の木曜版とかを見てっていう方がほとんどで、募集するに当たっては経験者とか、何か条件っていうのは特になく、今年度は広報誌と新聞、若干のチラシや基幹誌に載せて募集をかける
	応募があっても怖いのか仕事や家庭の事情を理由にボランティアが続かない	怖いとは言わないけど、やっぱり何か仕事があるとか、家庭の事情でとか理由をいってボランティアが続かない
	支援内容が不明確で応募がなく試行錯誤している	一緒にモヤシのひげをとるとか、畑作業とか、缶つぶしとか収集に行くとか分かりやすいボランティアは募集がしやすいし、定着もすると思うが、精神に特化したところへのボランティアはあんまり応募がなく、どこでも試行錯誤していると思う
コーディネートしても折り合いがつかないマッチングの難しさ	当事者によるボランティアは、支援内容を検討しても、ハードルが高いのか当日に約束を守らなく継続するのが難しい	継続して行う子どもたちの居場所のボランティアは厳しいのでできるものからと、イベント的な高齢者のお宅や、障害をお持ちの方の旧盆の前やお正月の前の大掃除を、一緒にやりませんかって声掛けるけど、いざ当日になったら、やっぱり体調が悪いとか、何かにつけてちょっと難しいって言い、いったん社協のほうに来てもらい、何人かのボランティアとグループを組んで私たちが送迎して行くけど、やっぱり緊張している 精神障害を持っていてもボランティアしたいっていう人は、ボランティアの依頼内容と、ここまでだったらできるっていう内容を検討しても、「俺はできない」とかってなっちゃってボランティアをやりたい人のバランスがとれない (当事者が) ボランティアの応募があるが、いざ、依頼に対し申し込みがあっても、ハードルが高いのか、まず来なかったり続かない
	当事者によるボランティアは、ボランティアセンターによるコーディネートは難しく、精神科に特化した相談員が紹介した方がよい	当事者ボランティアは、C地区の様に普段の公民館活動の中で、ちょっと体調悪く来大丈夫なボランティア活動もあるが、ボランティアを紹介するからには、やっぱり活動できる方を求めているので、当事者にとってプレッシャーがかからず、すぼかしが起きても大丈夫な所を紹介することができる精神科に特化した相談員のほうがマッチングをやりやすく、こちらではマッチング難しい
地域で生活する当事者からのボランティアの要請があるが、できる支援と折り合いをつけるのが難しい	病院の先生はハリハリ目的でボランティアを勧めるが、当事者によるボランティアは活動範囲が限られマッチングが出来ない	病院の先生としては、社会参加の意味でボランティアを勧めるが、ボランティア活動する方もやっぱり責任感持ってもらわないといけないので、活動範囲がどうしてもすごい狭くなってしまおうので、活動先が探せなく、何かちょっと(職場)復帰前に外に出る機会として、ボランティア登録みたいな感じでやってくる人が、最近ちょこちょこ応募してくるが、やはりマッチングがうまくいかない
	地域で生活する当事者からのボランティアの要請があるが、できる支援と折り合いをつけるのが難しい	地域で生活する当事者からのボランティアの依頼内容によっては、『そこはちょっとできません』とか折り合いを付けていくけど『それじゃあ、あなたなんかにもう頼まない』って怒ったりされ、ここまではやってほしい、ここまではできるっていう折り合い付けるのが大変 明日美容室行きたいとか、安い買い物先を探して連れて行ってとか、車に乗せてとか、当事者からボランティアの依頼があるが、自分たちは人材派遣会社とかではなく、すぐにボランティアが見つかるかも分からないので、結構要望があり困っている
地域で生活する当事者からボランティアの依頼は、支援者間で差がないよう支援内容に線引きをしている	公的機関による支援は、依頼者が依存しがちになり、この人はやってくれたのに、この人はやってくれないみたいな差が出てくると、ちょっと難しいので、ある程度支援内容に線を決めている	

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
	地域で生活する当事者からボランティアの要請は専門職からの助言を受け支援内容に線引きをしている	精神疾患の方から、家に来て話を聞いてほしいという相談があったが、専門職に相談したら、個別で自宅に訪問して傾聴とかかっていうのはあんまり良くなく、本人の自立を考えると、支援センターなど外に出て、いろんな方と触れ合いほうが本人のためになると言われお断りした
役立っている実感が得られない支援内容	何かの役に立つとかっていう実感があってボランティアと思われているが、精神保健福祉ボランティアは、自分は何をすればいいんだろうっていうところがある	大規模災害にボランティアがいっぱい出ており、何かやりに行って喜ばれるとか、何かの役に立つとかっていう実感があってボランティアっていう風になってるが、精神障害の仲間とずっといたって、きっと自分は何をしてるんだ、何をすればいいんだろうっていうところがあり、ボランティアっていう呼称というか、概念というか、その部分を変えないといかんじゃないかみたいところがある
	先走って当事者のために何かをすることは求めていなく当事者のペースに合わせる支援は難しい。	(精神保健福祉ボランティアは) 何もしないことをこちらは求め、利用者の方が動くのを邪魔したり、先走って何かしてほしくないんで、そこをうまく一緒に合わせられる方が必要で、ボランティアの支援がとても難しいと思う
	テレビを一緒に見たり隣に座っているだけの支援は多くの人が戸惑いを感じる。	(精神保健福祉ボランティアには) テレビ一緒に隣に座って見たり隣にいてくれればいいが、いざそれをやることはすごく戸惑うし難しい (精神保健福祉ボランティアには) 何気なく隣にいてくれて、一緒にぼそぼそ喋ってしゃべってもらえることを求めているけど、なかなかそうやってできる人は少ない
耐えられない居心地の悪さ	独特の空気感がある精神障害者のボランティアは過半数の人が居心地の悪さを感じる。	この空間(当事者と一緒の)にいられるかができなければ、ボランティアとしてもいられない。まず、この空間で利用者さんたちと何もせず、お話するだけの、この空気感の中でいられない人ではボランティアするのは難しく、思った以上に過半数の人は耐えられなく居心地の悪さを感じる人が多い
ニーズのない精神障害者へのボランティア活動	ニーズのない精神障害者へのボランティア活動	2～3年前ぐらいに、地域の福祉施設、保育園、高齢者、障害者の事業所とかの方に、ボランティア必要とする場面とかニーズってありますかというアンケートをとったが回答してくれたのは保育園とか、高齢者の施設で、デイサービスのところだけだったので、(精神) 障害のとの分野ってあんまりニーズがなくボランティアが入るような活動がない

ンティアを勧めるが、ボランティア活動する方もやっぱり責任感持ってもらわないといけないので、活動範囲がどうしてもすごい狭くなってしまいうので、活動先が探せなく、何かちょっと(職場)復帰前に外に出る機会として、ボランティア登録みたいな感じでやってくる人が、最近ちょこちょこ応募してくるが、やはりマッチングがうまくいかない」だけでなく、「(当事者) ボランティアの応募があるが、いざ、依頼に対し申し込みがあっても、ハードルが高いのか、まず来なかったり続かない」といった当事者ボランティアの難しさが語られた。

ボランティア依頼者に対しては、「明日美容室行きたいとか、安い買い物先を探して連れて行ってとか、車に乗せてとか、当事者からボランティアの依頼があるが、自分たちは人材派遣会社とかではなく、すぐにボランティアが見つかるかも分からないので、結構要望があり困っている」といった【コーディネートしても折り合いがつかないマッチングの難しさ】を感じていた。

【役に立っている実感が得られない支援内容】では、(何かの役に立つとかっていう実感があってボランティアと思われているが、精神保健福祉ボランティアは、自分は何をすればいいんだろうっていうところがある。)、(テレビを一緒に見たり隣に座っているだけの支援は多くの人が戸惑いを感じる。) などであった。また、「この空間(当事者と一緒の)にいられるかができなければ、ボランティアとしてもいられない。まず、この空間で利用者

さんたちと何もせず、お話するだけの、この空気感の中でいられない人ではボランティアするのは難しく、思った以上に過半数の人は耐えられなく居心地の悪さを感じる人が多い。」と【耐えられない居心地の悪さ】を感じると語られた。

また、【依頼がない施設からの要請】では、「2～3年前ぐらいに、地域の福祉施設、保育園、高齢者、障害者の事業所とかの方に、ボランティア必要とする場面とかニーズってありますかというアンケートをとったが回答してくれたのは保育園とか、高齢者の施設で、デイサービスのところだけだったので、(精神) 障害のとの分野ってあんまりニーズがなくボランティアが入るような活動がない」と語られた。

7. 精神保健福祉ボランティアへの思い

研究協力者の語った精神保健福祉ボランティアに期待することでは10コード、3サブカテゴリー、2カテゴリーが抽出された。

【楽しい活動として広がることへの期待】では、「私たちは長く細くでもいいのでお付き合いでき、そこから『ボランティア楽しいからあなたもしない』とか、誰かに声を掛けてくれるとか、そういう広がりを期待している」と語られた。【自然な交流による当事者理解】では、「高齢者とか子育てによる虐待は、地域のみんなで見ているねみたいなのがあるけど、特に精神の障害の人は普通

表6. 今後精神福祉ボランティアへの思い

カテゴリー	コード
楽しい活動として広がることへの期待	私たちは長く細くでもいいのでお付き合いでき、そこから『ボランティア楽しいからあなたもしたい』とか、誰かに声を掛けてくれるとか、そういう広がりを期待している
相互交流による当事者理解	<p>精神障害者は偏見があるため理解が促進される交流の場づくりへの期待</p> <p>高齢者とか子育てによる虐待は、地域の人みんなで見ていこうねみたいなものがあるけど、特に精神の障害の人は普通に歩いているだけで、やっぱり独特の雰囲気あり、怖いとか、ほんとかどうか分からないけど包丁持って立っているみたいな印象がまだまだあり当事者も一生懸命地域で生活していることが理解され、地域の中で暮らしていけるように、少し見守り、理解を広めるために、少しお互いに歩み寄るといふか、きっかけが必要で、触れ合い交流する機会として、何かの一つのイベントとか、ボランティアと一緒にやるとか、そういう交流があればいい</p> <p>社会福祉協議会で何十年前から、障害者の人と一緒にキャンプしたり、釣りに行ったり、サービスじゃなくて普通に遊びに行くと、ボランティアの人と過ごす時間を作っていた。今年はカヌーや、アウトドアを障害者の人とボランティアの人とやろうって企画をして、福祉って表に出すよりも、何か遊びと一緒にやりお互いの理解が広がるような交流の場があったらいいと思う</p> <p>(B地区のゆんたく会は、精神障害者) 理解にもつながるので、住民が公民館を拠点に活動しているけど、普段から精神障害者が公民館出入りしているの、地域性の中で、『なんだ私たちと変わらないんじゃない』みたいに、高齢者もほんとに自分の息子かのように接してくれたりとかするので、障害理解には結構つながる</p> <p>ボランティアが職員のように動こうと思ひ、私たちがロールモデルになってしまうと職員がどんどん増えてくだけなので、職員ようになってほしくもなく、何気ない話をするのはとても難しいので黙って座っていて大丈夫なのでありのままでいてくれる人にボランティアに来てほしい</p> <p>初めてこの事業所に来ると、皆さん職員と利用者さんの境が分からないっていうか、誰が利用者さんなのって、そこをすごく大事にしており、街の中でも精神障害というたすき付けて歩いているわけじゃないので、そういう線引きじゃなくって、街の中の人で自分がお付き合いできる対象っていうか、おしゃべりしたいと思ってボランティアに来てほしい</p> <p>講演会とかもちろん大事なかもしれないけど、私自身この仕事する前は精神障害者にあまり関わったことがなかったが、実際に話したら、ちゃんと1人の人間っていうか、生活している方だったので、まず、話をしてみる方が、より身近に感じてもらえると思うので、実際に話しをしたり地域の人たちが普通に関わる中でボランティア活動のきっかけになればと思う</p> <p>身体障害とは異なり、精神障害の場合、何をしてほしいっていうのは直接あるわけじゃないので、ボランティアに来たほうも戸惑いがあると思うが、そばに居ることから何らかの交流が始まり、お互いに誤解のないよう付き合っていけばいいと思うけれど、一般のボランティアをイメージして応募してくると戸惑うことがあるため、ボランティアの名称に何かもっと別の言い方がないかと思う</p>
精神障害者へのボランティアは戸惑うことが多いが一人の人として精神障害者に接してほしい	

に歩いているだけで、やっぱり独特の雰囲気あり、怖いとか、ほんとかどうか分からないけど包丁持って立っているみたいな印象がまだまだあり当事者も一生懸命地域で生活していることが理解され、地域の中で暮らしていけるように、少し見守り、理解を広めるために、少しお互いに歩み寄るといふか、きっかけが必要で、触れ合い交流する機会として、何かの一つのイベントとか、ボランティアと一緒にやるとか、そういう交流があればいい」や「精神障害者へのボランティアは戸惑うことが多いが一人の人として精神障害者に接してほしい」と【相互交流による当事者理解】への思いを抱いていた(表6参照)。

VI. 考察

1. 沖縄県における精神保健福祉ボランティアの現状

精神障害者を対象としたボランティアの現状を調査した鮫島(2000)によると、ボランティアを行う以前に精神障害者と接する経験のある者がボランティア活動を

行っていたが、本研究においても、精神障害者の家族や友人など身近な生活の中で精神障害者と接触体験がボランティアを行う動機となっていた。先行研究(鮫島, 2000)と異なるのは、【精神障害者事業所立ち上げのスキル習得目的】がボランティア応募の動機となっていた点である。これは、2013年の「障害者雇用促進法」改正を背景に、沖縄県においても、2011年には就労支援事業所が169か所だったものが、2017年には491か所となり、5年間で約3倍に増加したこと(沖縄県障害福祉計画, 2017)、事業所を立ち上げるために精神障害者への対応スキルを習得する目的のボランティア応募者が増加したものと考えられる。

一般的に、ボランティアとは他者に強制されなくても自分の意志で見返りを求めずに行う行為であるが(伊藤, 2011)、本研究では、<就労にむけたボランティアでの足慣らし>や<精神科医の勧めによるリハビリ目的>など、医療専門職からの勧めが精神障害者を持つ当事者ボランティア活動の参加動機となっていた。本研究では、

「当事者によるボランティアは、支援内容を（当事者に合わせて）検討しても、ハードルが高いのか、当日にすっばかしたりと継続するのが難しい」と語られ、当事者の主体性がないままのボランティア応募が活動意欲の低下に影響していたものと考えられる。精神科病院における在院日数の短縮化に伴い、退院後の就労の足掛かりとして患者ボランティア活用への参加を医療者側が推奨することは容易にされているが、本研究結果から、当事者の活動意欲だけでなく、ボランティア活動先とのマッチングを行う支援員とっても非常に調整が困難になることが示唆された。よって、入院中の患者であっても、ボランティアへの応募については患者自身の自主性を尊重した勧誘が重要であると考えられる。

また、ボランティアの支援内容に関する先行研究では、保健所のデイケアや精神福祉センターなど施設における単発のボランティア活動が多く、活動の内容はバザーや行事の手伝い、デイケアの作業への参加（鮫島、2000）などが主であった。本研究の結果、【精神科病院デイケア活動への技術提供】【精神障害者事業所活動への参加】は鮫島（2000）と同様の内容であった。しかし本研究では、【公的支援が受けられないごみ屋敷の清掃】【公民館で行う区民との交流】【距離を保ちながらの声掛けや日常的な見守り】といった地域における支援が行われていたことが明らかになった。これは、精神障害者の地域生活移行にともない、地域における精神保健福祉ボランティアのニーズが高くなったことが背景にあると考えられる。そのため、制度の狭間にある【公的支援が受けられないごみ屋敷の清掃】や、孤立した地域生活をおくる精神障害者への支援の必要性を感じた区長が中心となり、【公民館で行う区民との交流】の場の立ち上げに至っていた。鮫島（2004）は、精神障害者が地域生活を営むには、地域住民が対等な立場でアドバイザーとして関わるのが重要と述べている。その理由として精神障害者は、疾患の特性からコミュニケーションを円滑に行うことが出来ないことや、これまで閉ざされた場所で過ごしてきたことから、地域生活をおくるための情報や生活技術を獲得していない場合が多い（鮫島、2004）ことが上がる。本研究では、地域住民が精神障害者のために、室内スポーツをしたり、一緒に料理をつくったり、みんなでお茶を飲むなど、毎月2回程度定期的に公民館でイベントを行い、地域ぐるみで精神障害者を受け入れていた。この活動によって精神障害者と顔見知りとなった地域住民は、「あんた、たばこ吸っていたら早死にするよ」と注意したり、集まりに来なかったときは、「ああ、今日は来ないね」と精神障害者に関心を持つようになっていた。姉尾（2008）は、地域住民が精神障害者との接触体験を重ねる中で、精神障害者への意識が変化し両者の社会的

距離が小さくなると報告している。本研究では、公民館での様々な活動を通して【相互交流による当事者理解】が深まり、偏見や差別なく地域住民がアドバイザーとして関わるることができたものと考えられる。

2. 精神保健福祉ボランティア支援者のボランティアへの思い

本研究では、ボランティア支援員が精神保健福祉ボランティアの養成の依頼を受け行われてきたが、開始当初は養成講座を行っていたが【ボランティアに繋がらない座学】になり、現在では【実際の体験してもらうことでの当事者理解の促進】を行い試行錯誤している現状が明らかになった。それにもかかわらず、精神保健福祉ボランティアが活動を行う上での困難さが示唆され、精神障害者に関わる上での困難を解消する方法を見出すことが今後の課題として、本研究では明らかになった。精神保健福祉ボランティア継続の難しさについては、2か所の事業所で、ボランティアを募集しても応募がない現状と、ボランティアに応募があっても長続きせず、ある特定の個性的な人だけが継続できている現状が明らかになった。「ボランティアはやっぱり続かないというか、怖いとは言わないけど、やっぱり何か仕事があるとか、家庭の事情とか理由を言って続かない。」との語りからも、精神障害者への偏見が一因になっていることが示唆された。山田ら（2000）は、地域には精神障害者を精神科病院に隔離収容してきたことから地域住民が精神障害者と接する機会を失い偏見を強めた結果、精神障害者への偏見を地域住民が抱いていると述べている。このように、地域住民には精神障害者に対し根強い偏見があるため事業所が手を尽くしても他のボランティアと異なり精神保健福祉ボランティアへの応募がない状況になっていると考える。

さらに、精神保健福祉ボランティアに応募があっても継続が困難な現状も明らかになった。山田ら（2000）は、精神保健福祉ボランティアを対象としたアンケート調査の結果、ボランティア活動において最も困った点は当事者との接し方であり、約4割のボランティアが当事者への話しかけ方や沈黙に戸惑いを感じたと述べている。本研究においても先行研究と同様に、ボランティアは、精神障害者との交流において【耐えられない居心地の悪さ】を抱いていた。中井（2004）は、医療者であっても統合失調症患者の横に座る者は不思議な苛立ちを感じてしまい、患者の傍に居ることはとても難しいと述べている。姉尾（2016）は、保健医療福祉職、民生委員や知的障害者へのボランティア活動の経験がある者でも、精神障害者との関りづらさを感じ試行錯誤していると述べている。つまり、専門職であっても、精神障害者の傍に居るのは

難しいことであり、本研究で協力者の語った精神保健福祉ボランティアは、専門的知識のないボランティアであり、当事者と一緒にいることに居心地の悪さや戸惑いなどマイナス感情を抱くことが、精神保健福祉ボランティア活動の継続を困難にする要因になっていたと考える。

また、【役に立っている実感が得られないボランティア活動】の語りでは、「一緒にもやしのひげをとったり、畑をやったりするように、はっきりした作業がない精神保健福祉ボランティアの場合、ただ一緒にいるということの難しさを感じ、ボランティアを行っていることに役立っている実感を持ってない」とも協力者は述べていた。姉尾 (2016) は、身体・知的障害ボランティアの豊富な経験を持つボランティアであっても精神障害者への支援は、身体障害者と異なり車いすを押すなど具体的な日常生活援助を必要としないことから、支援内容が不明確で「自分に何ができるのか」という困難感を抱きながら試行錯誤し関わっていると指摘している。本研究では、ボランティアに対し、支援員が精神障害者に「自然に関わってほしい」と教示しているが、経験豊富なボランティアであっても精神障害者への関わりにおいては試行錯誤しており、ボランティアは【役立っている実感が得られない支援内容】に加え、【耐えられない居心地の悪さ】を感じていることが示唆された。「自然に関わる」といった漠然とした内容ではどのように関わって良いのかわからないため、具体的な関わり方を示す必要があると考える。

よって、精神保健福祉ボランティアを定着させるには、言語的コミュニケーションを中心としない簡単なゲームや遊びなど具体的に関わりを持つための媒介となるものを示し、「相手が話しかけなければ無理に話しかけなくてもよい」ことなど、具体的な関わり方を教示する必要があると考える。また、精神保健福祉ボランティアの継続につながっていたC事業所ではボランティアが1対1で精神障害者に関わるのではなく、複数名のボランティアが複数の？当事者とカラオケや料理をなど行き交流する取り組みがされていた。今後、地域における精神障害者への根強い偏見がある中で、精神保健福祉ボランティア活動の継続や拡大をするためには、複数名のボランティアがグループでボランティア活動を行うことも一つの手段であり、そのような関わりを通してボランティアのみならず地域住民の精神障害者への理解の促進につながる可能性が示唆された。

VII. 結論

沖縄県における精神保健福祉ボランティアの現状と支援者の思い明らかにするため沖縄県の3か所の精神障害者支援事業所の6名のボランティア支援員の語りから明

らかになったことは次の通りである。沖縄県の精神保健福祉ボランティアによる支援内容では、【公的支援が受けられないごみ屋敷の清掃】【公民館で行う区民との交流】【距離を保ちながらの声掛けや日常的な見守り】【精神科病院デイケア活動への技術提供】【精神障害者事業所活動への支援】が行なわれていた。しかし、【利益にならないボランティア活動への大学生参加の難しさ】【手を尽くしても応募がない精神保健福祉ボランティア】【コーディネートしても折り合いがつかないマッチングの難しさ】【役立っていると実感が得られない支援内容】【耐えられない居心地の悪さ】【ニーズがない精神障害者へのボランティア】といった困難を抱えていた。今後、精神保健福祉ボランティア支援者はボランティアに【楽しい活動として広がることへの期待】【相互交流による当事者理解】への思いを抱いていることがあきらかになった。

VIII. 研究の限界

本研究は、沖縄県の地域での精神保健福祉ボランティアの具体的な実施状況やボランティア支援者の思いについて明らかになった。しかし、沖縄県では精神障害者継続支援施設が急増しており、今後はさらに小規模事業所のボランティアの実態も調査を行う必要がある。

謝辞

本研究にあたりご協力、ご配慮くださいました、社会福祉協議会ボランティア担当職員の皆様、A市地域生活支援センターの職員の皆様、公益社団法人沖縄県精神保健福祉社会連合会の高橋年男様には心より感謝申し上げます。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 姉尾弘子 (2008). 地域における精神障害者の支援の現状と今後の課題—精神保健福祉ボランティアの支援の意義に焦点をあてて—, 東京女子医科大学看護学会誌, 3(1), 1-8.
- 姉尾弘子 (2016). 精神保健福祉ボランティアが地域で暮らす精神障害者との関わり方を探るプロセス, リハビリテーション連携科学, 17(2), 137-146.
- Bradshaw T, Haddock G (1998). Is befriending by

- trained volunteers of value to people suffering from long-term mental illness?, J Adv Nurs, 7(4):713-20.
- 今井博康, 三品斉, 橋本菊次郎, 栗田克実 (2009). 精神保健ボランティア養成講座プログラム開発に関する研究. 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 2, 91-100.
- 伊藤忠弘 (2011). ボランティア活動の動機の検討. 学習院大学文学部年報, (58), 35-55.
- 栗原琴乃, 蛭田朱美, 堀川美紀, 山本渚 (2003). 精神保健ボランティアグループの意識調査 グループ面接調査. 四国公衆衛生学会雑誌, 48(1), 70-71.
- 厚生労働省 (2019年8月2日検索). www.mhlw.go.jp/
- 公益社団法人沖縄県精神保健福祉会 (2019年5月1日検索). [www.okifukuren.org > publics > index/](http://www.okifukuren.org/publics/index/)
- 公益社団法人沖縄県精神保健福祉会 (2019年5月1日検索). www.okifukuren.org/
- 中井久夫, 山口直彦 (2004). 看護のための精神医学 第2版. 医学書院.
- 沖縄県保健医療部健康長寿科業務資料 (2019年9月23日検索). [https://www.pref.okinawa.jp > site > hoken > kenkotyoju./](https://www.pref.okinawa.jp/site/hoken/kenkotyoju/)
- 鮫島光子 (2004). 精神保健ボランティアの現状と役割 神奈川県内の精神保健ボランティアのアンケート調査を中心に. 精神障害とリハビリテーション, 8(1), 55-64.
- 障害者の現状－沖縄県 (2019年4月30日検索). [https://www.pref.okinawa.jp > site > shogaifukushi > keikaku > documents.](https://www.pref.okinawa.jp/site/shogaifukushi/keikaku/documents)
- 障害者の現状－沖縄県 (2019年4月30日検索). [https://www.pref.okinawa.jp > site > shogaifukushi > keikaku > documents.](https://www.pref.okinawa.jp/site/shogaifukushi/keikaku/documents)
- Thompson R, Valenti E, Siette J, Priebe S. (2015). befriend or to be a friend: a systematic review of the meaning and practice of "befriending" in mental health care. J Ment Health. 25(1), 71-7.
- 山田光子, 北原亜紀子 (2000). 精神保健ボランティアの精神障害者に対する態度. 山梨医大紀要, 17, 75-79.

The Current Situation of Mental Health and Welfare Volunteering in Okinawa Prefecture and Thoughts from Volunteers

KITO Kazuko, SUZUKI Keiko

Abstract

The purpose of this study was to identify the current situation of and issues with mental health and welfare volunteering in Okinawa Prefecture and to clarify the support that volunteers in local communities desire and expect. Semi-structured interviews were performed with the staff members in charge of the education and training for volunteers in three mental health and welfare centers in Okinawa Prefecture. A qualitative and inductive approach was employed to analyze the data. The results of the interview survey from six research participants extracted the following desired support items from mental health and welfare volunteers: “cleaning of gomi-yashiki (a house overflowing with garbage), which cannot gain public support” ; “community interaction programs with related people organized by area” ; “greeting and watching at an appropriate distance” ; “providing their skills to day care activities in a psychiatric hospital” ; and “participation in activities in a center for people with mental disorders.” Furthermore, the analyzed data of two of the centers suggested that in the current situation of seeking volunteers, when the centers recruited mental health and welfare volunteers, they had no applicants. Even when a person applied, they did not move towards performing volunteer activities. Countermeasures are required to encourage volunteers to continue activities. It is necessary to present volunteers with methods that mediate between the volunteers and people with mental disorders, and to support concrete involvements with the disabled. It was confirmed that continuous volunteer activities were not characterized as a one-to-one relationship, but rather as multiple volunteers’ participation, such as karaoke and cooking. The present study suggested that volunteer support conducted by a group with multiple members would enhance volunteer activity and could promote a better understanding of people with mental disorders, as well as improve the stability of volunteering when there might be prejudice or fear toward people with mental disorders.

Keywords: Mental health and welfare, Volunteer, Okinawa